

# 信州大学附属図書館中央図書館の増改築と課題解決

森 一 郎 (新潟大学学術情報部学術情報管理課)

## 1. はじめに

多くの大学で、主として図書館にラーニング・コモンズが整備され、それぞれのラーニング・コモンズにおいて、アクティブ・ラーニングが展開されるように様々な工夫がされている。

信州大学附属図書館においても、平成26年度に中央図書館の増築を行い、この増築によりラーニング・コモンズに相当する学習スペースの整備が行われた。

筆者は平成24年度から平成26年度にかけて信州大学に在籍し、その増築に関わった1人として本稿執筆の機会をいただいたが、学術誌の体裁をとる信州大学附属図書館研究に何をどのように書くべきか非常に悩ましいところである。また、増築および増築に先立って行われた耐震改修に関する記録的な記事が別に書かれることと思う。重複する部分が多いと思うが、多少なりとも別の視点が加わっていれば幸いである。

## 2. 増築に至るまで

信州大学は5つのキャンパスを有し、附属図書館は中央図書館、教育学部図書館、工学部図書館、医学部図書館、農学部図書館、繊維学部図書館の6館からなる。

中央図書館と医学部図書館は松本市、教育学部図書館と工学部図書館は長野市、農学部図書館は南箕輪村、繊維学部図書館は上田市にあり、松本市と長野市とは約70km、松本市と上田市とは約40km、松本市と南箕輪村とは約60km、長野市と南箕輪村とは実に約120kmの距離という位置関係にある。

増築前の中央図書館は昭和48年に建てられた3階建て延べ3,216㎡の建物の北側に、昭和56年に建てられた同じく3階建て延べ1,227㎡の建物があり、上空から見ると、いわば漢字の「呂」のような形であった。

中央図書館の増築が具体化するまでは、南側の建物を旧館、北側の建物を新館と呼んでいたと記憶するが、新館という呼称は、この北側の建物のことを言うのか、増築しようとする建物のことを言うのか紛らわしいため、便宜上、旧館を南棟、新館を北棟と呼ぶようにしたところ、その後、それが定着したため、本稿においても、その呼称を使用する。

増築が具体化する前、附属図書館としての大きな動きの1つとして、平成23年度の附属図書館将来構想策定委員会の設置がある。

この委員会は平成24年1月18日に「信州大学附属図書館将来構想案2011」(以下、「構想案2011」という。)を策定しており、中央図書館を含めた6館のフロア再編のほか、中央図書館の北棟の東側に4階

建て延べ2,240㎡を増築することで諸課題を解決するように提言している。

構想案2011で示された課題は、概ね以下のようにまとめられる。

1. 多様な研究・学習に対応した環境の整備……ラーニング・コモنزの整備とパソコン環境の充実
2. 資料保存機能の充実 ……………資料の集中配架と空間の有効利用
3. 研究環境の充実 ……………研究者用カウンタの設置
4. 機能的な学習支援 ……………ガイダンス等の充実
5. 図書館地域貢献の推進 ……………展示スペースの整備と地域連携

「1. 多様な研究・学習に対応した環境の整備」でラーニング・コモنزの整備を掲げているが、構想案2011が練られている頃、既に各地の大学図書館でラーニング・コモنزの整備が進みつつあり、その点を意識したものと言える。

6館からなる信州大学附属図書館においては、平成23年度に耐震改修が行われた工学部図書館にはラーニング・コモنزに類する機能を有するスペースが設けられてはいたものの、ほぼ整備されていない状態であった。また、上述のとおり、6館それぞれが大きく離れていて容易に行き来ができないため、ラーニング・コモنزも例えば中央図書館で整備すれば用をなすというのではなく、6館それぞれに整備しなければ、その目的を達し難い。

それに加えて、「2. 資料保存機能の充実」に関して、蔵書数が収容能力を大きく超えているという実態があり、ラーニング・コモنزを設ける空間的な余裕は全くない状況であった。なお、構想案2011には平成23年3月31日現在のデータとして、以下の表が掲載されている。

項目	計	中央図書館	教育学部	医学部	工学部	農学部	繊維学部
総棚板延長 (m) A	34,668	13,416	5,576	6,488	3,592	2,255	3,341
収容可能冊数 <sup>※1</sup> B	963,001	372,667	154,889	180,222	99,778	62,639	92,806
蔵書冊数 C	1,245,446	501,834	189,101	176,948	160,256	102,121	115,186
飽和率 (=C/B)	129	135	122	98	161	163	124

※1 収容可能冊数は、学術情報基盤実態調査に準拠した算式 = A/0.9 × 25

このような状況を踏まえて、構想案2011で北棟の東側に建てるように提言された建物においては、4フロアのうち3フロアを書庫的機能とし、約80万冊の収容を可能とした上で、各館の資料を可能な限りそこに移して空間的な余裕を作り、そうして各館にラーニング・コモنزの機能を設けるという構想であった。

他方、構想案2011では大きな扱いになっていないが、中央図書館既存棟の課題として、南棟の構造耐震指標(Is値)の不足があった。これについては平成25年度に予算措置がされ、解決できることになる。そして、この耐震工事は、単に南棟の不足しているIs値を充分なものにするというだけではなく、南棟のフロア構成を大幅に変える機会にもなる。

なお、幸い南棟の耐震工事が行われても北棟は使用可能な見込ではあったが、北棟には出入口、トイレ等の水道設備がなく、また、南棟3,216㎡と北棟1,227㎡とを合わせた合計4,443㎡が北棟1,227㎡のみの、ほぼ4分の1の面積となることから派生する問題を、いかに解決するかを検討を迫られることになる。それらの問題については、学内他部署および周辺地域の自治体ならびに企業の多大なる協力により解決することができたが、詳細については省略させていただく。

南棟のフロア構成の検討であるが、構想案2011にはない以下の2点の解決を目標とした。

第1に、中央図書館の利用者用の入口は、南棟の東南隅に上り口のある階段を上った2階であり、また、エレベータの1階部分は事務エリアにあって、南棟1階南側のほぼ中央部にある主に職員が使用する入口から入館しないと使用できない構造であったが、利用者の入口を1階に改めるとともに、エレベータを利用者用の入口からの入館で使用できるようにすること。

第2に、利用者の入口が2階にある関係で、サービス部門の事務室は2階にある一方、管理部門の事務室は1階にあったが、図書館業務全体の変質や個々の業務の増減に適切に対応するため、職員が1か所で執務できるように事務室を統合すること。

その上で、将来、増築した際、増築棟に利用者用の入口を移しつつ、既存棟と増築棟との間に十分な利用者動線が確保できることに留意したが、当初は構想案2011と同様に既存棟の東側へ増築することを前提にしており、これを前提にすると、既存棟の構造上、上記の2点の解決は困難と結論づけざるをえなかった。

すなわち、南棟の1階東側には機械室として使用していた区画があり、図書館として使用している区画と間には構造壁が存在するため、1階で既存棟と増築棟との十分な利用者動線を確保することは、ほぼ不可能ということである。

この結論から、増築する場合、その場所を既存棟の東側ではなく南側とするように転換し、フロア構成の検討を進めたが、ほぼ同時期に、附属図書館長を中心に役員に対して働きかけていた増築について、その主眼を資料の収容能力の向上から学習空間の充実に移すことで、資金投入が決定された。

増築工事の詳細についても省略するが、ラーニング・コモンズを設置すれば自然発生的にアクティブ・ラーニングが展開されるというわけではなく、また、変わった形の椅子や机を置いた場所、あるいはカラフルな場所がラーニング・コモンズではない。このことから、増築された建物そのものや増築部に新たに設置された什器類については、デザイン性が高いものを採用しておらず、全体に平凡なものとしている。

### 3. 増築と並行して

増築の主眼を学習空間の充実に移したことで、増築による収容能力の向上は見込めなくなった。

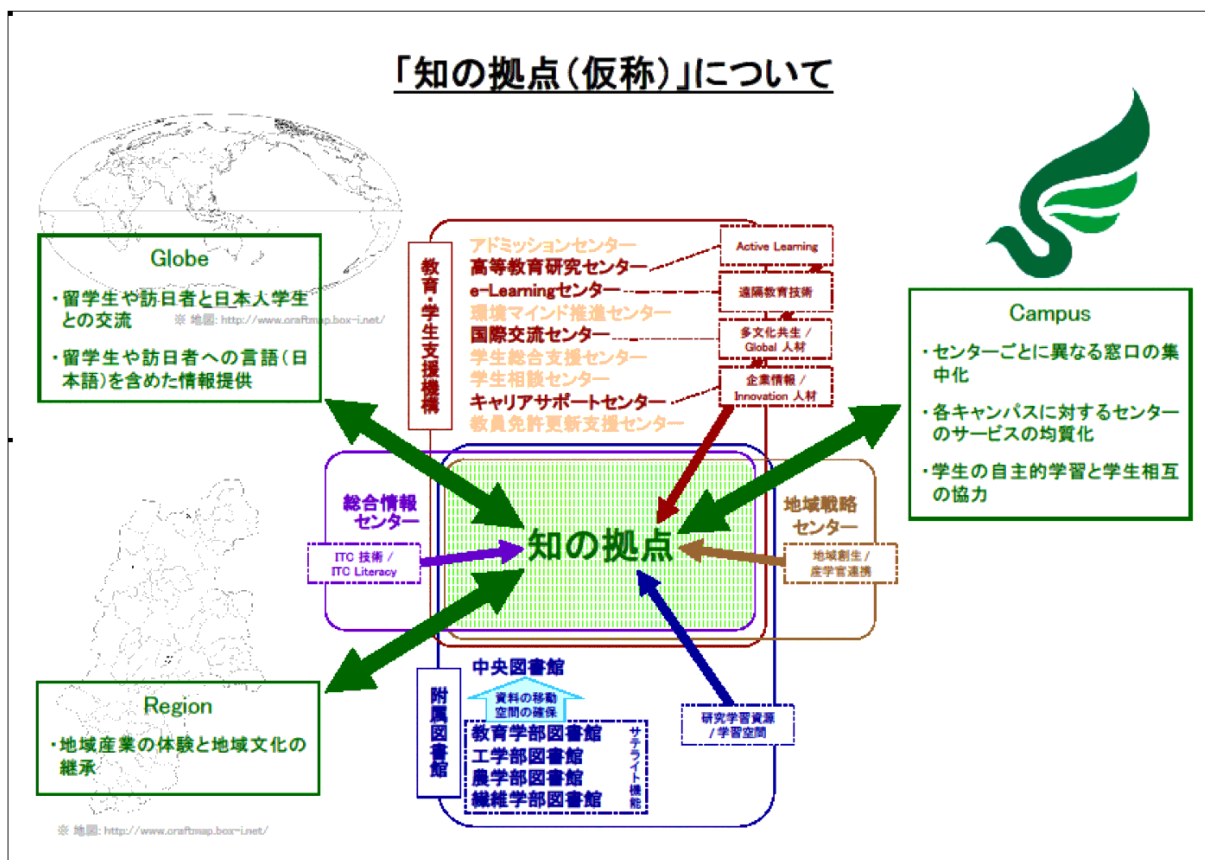
上述のとおり、中央図書館のみ学習空間の充実を実現しても、松本キャンパス以外のキャンパスで学習する利用者には用をなさないと言える。一方、中央図書館以外の5館も増築できれば学習空間の問題は解決できるが、それは現実的ではない。しかしながら、各館における資料の飽和率は上掲の表のよう

な状況であり、各館の資料を別の場所に移して空間的余裕を作るなどの方策をとらなければ、学習空間の整備もできない。

端的に述べれば、さらに、いずれかのキャンパスに増築が必要ということになるが、単に書庫機能のみの建物であれば発展性はないため、従来の図書館の枠を超えた、学術情報以外の情報をも提供する施設とすべく、平成26年度に教育・学生支援連絡調整会議の下に「知の拠点(仮称)」設置に向けたワーキング・グループを設置していただき、検討を行った。

教育・学生支援連絡調整会議とは、信州大学に設置されている教育・学生支援系のセンターである、アドミッションセンター、高等教育研究センター、e-Learningセンター、環境マインド推進センター、グローバル教育推進センター(当時は、国際交流センター)、学生総合支援センター、学生相談センター、キャリアサポートセンター、教員免許更新支援センターに加えて、全学教育機構(初年次の教養教育を行う)、総合健康安全センター、総合情報センターおよび附属図書館の連携を図り、教育・学生支援に関する各種事項を検討する場である。

「知の拠点(仮称)」設置に向けたワーキング・グループでは、上掲の各センターの中から、高等教育研究センター、e-learningセンター、国際交流センター、キャリアサポートセンター、総合情報センターに加えて地域戦略センター、これら各センターの全部または一部を中央図書館に隣接した場所に移し、学内のみならず、周辺地域や全世界に向けて情報を発信するという構想のもと、下図のような概念をまとめた。



各センターとも、その中心は松本キャンパスにあり、附属図書館と同様に、それぞれが大きく離れたキャンパスで、いかにして等質な教育・学生支援などを行うかが課題であり、「知の拠点(仮称)」では各キャンパスに存在する各図書館をサテライトとして活用し、そのために必要となる空間的な余裕を作るために、合わせて書庫機能を整備することを構想した。

ただし、仮に「知の拠点(仮称)」が現実のものになったとしても、空間は有限である。学術資料の保存・継承は図書館の根幹的な機能であり、附属図書館として資料の保存機能の向上を図ることは重要であるが、保存すべき資料の精選も必要であり、除籍基準の見直しを増築工事と並行して行った。

なお、除籍基準の見直しに関しては、その発端が、保存空間の利活用という観点ではなく、資産管理業務の見直しという観点であり、また、他部署の所管となる規程類との調整が必要であったことから、残念ながら在籍中の完了をみなかった。

#### 4. おわりに

中央図書館に関しては、今回の増築によってラーニング・コモンズの機能を有するに至ったが、繰り返し述べているように、他の5館にもラーニング・コモンズの機能を整備する必要がある。

一方、これも上でも述べたが、ラーニング・コモンズを設置すれば自然発生的にアクティブ・ラーニングが展開されるというわけではないし、変わった形の椅子や机を置いた場所、あるいはカラフルな場所がラーニング・コモンズではない。すなわち、新たに設置された空間で何を提供するかが重要であり、それは信州大学附属図書館のみの課題ではなく、全大学図書館の課題であると言える。

平成26年度まで在籍した信州大学の前身校の1つである旧制松本高等学校と、平成27年度から在籍している新潟大学の前身校の1つである旧制新潟高等学校とは、第九高等学校の座を競い合ったという歴史を持つと聞くと、信州大学附属図書館と新潟大学附属図書館も図書館という空間で何を提供するかで競い合いつつも、情報交換等、協力しあえる関係を築きたいと考えている。

#### ※附記

信州大学在籍中、耐震工事や増築工事という大きな事業を大過なく実施できたのは、信州大学の役員の方々、学内他部署の方々、周辺地域の自治体や企業の方々のご理解とご協力、そして何より図書館職員の働きによるものであり、この場をお借りして御礼申し上げます。